

転生したらスカーレット家の三女だった。

ベリー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

スカーレット姉妹の三女になつて生きていく二人に励まされながら必死に生きていく

目
次

新たな生き場所	
姉妹の会話	
抵抗? なんだそれは僕は知らない	
戦闘訓練	
本を探して大図書館へ	
	10 7 5 3 1

新たな生き場所

今僕はとても不安で仕方ない。なぜかというと今日は学校で宿題をやつていないので。いつも先生に宿題で怒られていて宿題はやらなければいけないということは分かつてはいるがどうしてもやる気がでないのだ。楽しいことがたくさんあって宿題をやる時間をとれないのだ。今いつものごとく暗い気持ちで学校に向かっていた。

いつもこういうときは余り周りを意識していない。だからかもしれない

自分はいつの間にか車に引かれていた。そしてそのまま何も思うことなく死んでしまった。辛うじて見た最後の景色は自分の血で赤くなつたトラックだつた。

こうして13年というとても短い人生が終わってしまった。

次に気がついたときは目を開けると周りが真っ赤なところだつた。自分はこんなところ見たことがない

そして自分の手などは動かそうとしても動かなかつた。目も余り見えない。だが、辛うじて見えるものがある。

それは女性だつた。その女性はこちらを向くと

「あら、起きたのね。」

といつてきた。そして貴方は誰なのかと声を出そうとしたが

「あうああうあうー」

という声しかでなかつた。そして理解した自分は赤ちゃんなのだ

と

そしておそらくこの女性は母だろう。

そして何か声が2つ聞こえてきた

「お母様？私の妹は起きた？」

「もう、フランつたら今日からお姉ちゃんなんだからもつとおとなしくなりなさい」

といいながら二人の女の子が部屋に入ってきた。
見た感じだが落ち着きなさいと行つた女の子の方もかなりそわそわしている。

「あ？起きてる？」

といいながら抱っこしてきた。

突然のことだつたのでビックリして泣いてしまつた。泣くつもりはなかつたのだが涙せんがとても脆いようだ。

「こらフランもう少し優しくしてあげなさい」

母が言つた。フランは素直に謝つてくれた。

「驚かしちやてごめんね」

「もうフランつたら慌てすぎよ。私にも抱かせて？」

注意したときはおとなしかつたのにこちらを向くとフランみたいになつた

なぜだろうか？そんなにうれしいのだろうか？

なんにせよなかなか楽しそうだなと思つた

それから半月の時間がたつた

そしてわかつたことがある

；僕は女だつた

本当何ですか？いや前世男ですよ？どうせ女にするならせめて前世の記憶を消してくださいよ？

別に女なのが嫌なわけではないけどやつぱり抵抗があるので。

まあそれは一旦置いておくとしよう。

僕は吸血鬼になつたみたいだ。別にこれは良かつた。

ちなみに僕の名前はベリーに決まつたらしい。見た目は羽はフランお姉さまの羽と一緒に宝石がぶら下がつていた。でも色は青一色だ。服装はフランお姉さまと同じ服で色が青だちなみには髪も青だ。でもそれだと青しかないのではリボンや所々を緑にした。まあ口調は敬語の一人称は僕のままだ。たぶん絶対になおらないと思う

姉妹の会話

そしてそこからさらに3年ほどたつた。この三年間で僕は魔法の勉強をし始めた。

前世では勉強など大嫌いだつたが魔法の勉強は思つたより楽しくなかなか順調に進んでいる。そして1歳の時に初めて血ものんだ。やはり抵抗はあつたが飲んでみると美味しかつた。この三年で女の体にも慣れてしまつた。とこの三年間はこのぐらいだ。

そして今はレミリアお姉様とフランお姉様と話している

「ねえベリー、この頃魔法の勉強は順調かしら？」

「はい、順調に進んでいます。レミリアお姉様もやつてみたらどうですか？」

「いや、私には合わなさそうだからやめておくわ。」

「二人は固いことしか話さないからつまらないなあ。もつと面白い話ないの？」

「面白い話と言われてですねえ。普段僕は魔道書しか読みませんし知りませんねえ」

「私も特にないわねえ。あるとしたら何度も言つても治らないベリーの一人称ぐらいね」

「ほんと治らないよね。というかベリーは話始めた時からずっと一人称僕だしね。」

「ほんと、家には僕なんて言う一人称の人はいないのにねえ。どうして僕なのかしらねえ」

「残念ですね。僕はこの一人称を変えることはないので諦めてくださいね。」

「うんそういうと思つたよ。毎回言うもんね。でも絶対にその一人称を変えてあげるからね。無理矢理にでも。」

「え、ちょ何ですか？別にこのままでもいいじゃないですか？」

「そういうわけにはいかないわねえ。スカーレット家の者なんだから礼儀正しくないと口調はいいけど一人称を変えてもらわないと困るわ」

「まあというわけでお姉様もうやつてもいい?」

「え何をする?」「ええいいわよ思い切りやりなさい」「え何でちよとずつ近づいて来るんですか?」

「いや、一人称を直すと言うままでこちよぐろうと思つて。」

「やめて下さい?」うなつたら逃げ「逃がさないわよ?」離してくださいレミリアお姉様。ほらもうこちよぐろうとちかづいてきます。僕がこちよぐり弱いつて知つてますよね?」

「だからやるんじやないの。そんなことも聞かないと分からぬの?」

「いや、分かりますよですが他にも方法がある」「捕まえた」「ちよやめてんこちよぐらないでください。息が続かあはははややめ」チーン

「あもう氣絶しちゃた。いくらなんでも弱すぎない?」

「まあ氣絶しちゃたものは仕方ないわね。ついでにいつも一緒に寝ようつて言つても拒否されるけど今日は三人で寝ましょうか」

「そうだねお姉様 これまで三人で寝たことないし三人で寝ようか

」

抵抗？なんだそれは僕は知らない

「ん、あれ僕はいつの間に寝たんでしょうか？」

あれいつ寝たんだろう。確か昨日の夜はお姉様達と話していく自分の一人称の話になつて、ああそうかフランお姉様にこちよぐられて氣絶したんだつた。

「じゃああのあとお姉様達はどこに行つたんですかね？やつぱり自分の部屋ですかね？まあ起きていないかもせんし見に行きましょうか。それじやまずベッドからで「痛？」あれなんか柔らかいものを踏んで「退いて？痛いから退いて？」え？

あつあれフランお姉様？何で僕のベットで寝てるんですか？「もううるさいわねえ」レミリアお姉様まで何で僕の部屋に居るんですか？」

「何でつて言われてもねえあなたが氣絶したから居ただけよ？」

「何で自分の部屋に戻らないんですか？」

「いやあ今まで3人で寝たことなかつたからついでに一緒に寝ただけだよ？」

「……もう何言つても変わらないので諦めます」

「そうじやあもう一回寝ましようか。」

「え？もう起きる時間じゃないんですか？」

「外を見てみなさい。まだ明るいわよ」

「え？あれ本当だまだ明るい。」

「本当にですね。それじやもう一回寝るのでお姉様達は自分の部屋に戻つて寝てくださいね。」

「ええ何で？いちいち自分の部屋に戻るの面倒だしここで寝てもいいじゃん」

「ダメです」

「知らないわねそんなこと。ダメと言われても一緒に寝るわよ。それじゃお休み」

「お休みお姉様。それじや私も寝ようかな。」

「ちょ、勝手にきめ」「お休みベリー」あはいお休みなさい。てそ

じゃなくて！」

もう寝てる、うう一緒に寝るのか嫌な訳じゃないけどやっぱり抵抗があるんだよね。ふああ、眠い、寝よう

いざ入ったはいいけどやっぱり寝つけない

ちよとレミリアお姉様に抱きついて見ようかな？

むぎゅー

暖かい、これなら寝れそう。でももうちょっと抱きついていようかな。

フランお姉様にも抱きつこう。

フランお姉様も暖かい。もうちょっとこうしてよつとうーんもう眠いお休みお姉様達

「寝たわね。」

「うん寝たね。というかベリー初めて私達に抱きついて来たよね。」

「そうね何で抱きついてきたかわわからないけどまあ気にしないでいいわね。それじゃお休みフラン。」

「お休みお姉様。」

その次の朝

ベリー

、寝れない。いつもは寝れるのにレミリアお姉様のところに行こ
うかな？

いやでも今まで拒否してたのに何でこんなこと思うんだろう？

お姉様に抱きついて寝ようかな。ほんとなんでこんなこと思う
んだろう

戦闘訓練

そこからまた数ヶ月経つた。初めて3人で一緒に寝た日からたまに一緒に寝るようになつた。やっぱり慣れてくると大丈夫なんだね。

そして今はレミリアお姉様と特訓をしている。なんのかつて？

もちろん戦闘のだ

いつ危険があるか分からぬから今のうちから鍛えておくらしい。でもこの戦闘訓練がかなり大変だ。

もちろんここは幻想郷ではないので戦闘は殺し合いである。

そしてもうレミリアお姉様は能力が発現しているので能力も使ってくる。

レミリアお姉様の能力は原作同様「運命を操る程度の能力」だ。この能力でこちらの攻撃が分かるのか全く当たらない。

ちなみに能力は5才になると発現するらしい。

もうフランお姉様も発現していてこちらも原作同様「ありとあらゆるもの破壊する程度の能力」だ

自分も後2年で発現するがどんな能力になるのだろうか。出来るだけ扱いやすくて分かりやすいのが良いなあ。運命を操るつてよくわからぬしありとあらゆるもの破壊するつてのも使いずらそうだし。

ちなみに原作では狂氣があるけどフランお姉様には狂氣はない。

今のところはかも知れないけど自分というイレギュラーがいるからどうなるかは分からぬ。このまま狂氣出てこないかも知れないし。出来ればその方が良い。

と色々考えていたがそろそろヤバイ負けそう

「ちよ、ちよつと待つてくださいお姉様。まだこつちには能力も無いんですから少し位は手加減してくださいよ。」

「あら？ 実際の敵はそんな理由で手加減なんてしてくれないわよ？ それどころか確実に仕留めるために使えるものはすべて使うと思うわよ。」

「うーそれはそうですけど、…」

「さあ、無駄なことしゃべって無いで集中しなさい。」

そういうとお姉様はこちらに接近してきた。

まづい、肉弾戦に持ち込まれると絶対に負ける。肉弾戦はあまり得意じゃないんだ。

そう思い距離をとろうとするけどさせてくれない。

「距離なんてとらせないわよ。魔法を連発されたら避けるのが大変だからね。」

そう言うと一気にこちらとの距離を積めてきて蹴りを1発放つてきた。

僕は何とかそれを避けると詠唱無しで放てる魔法のなかで比較的威力の高い方の魔法を放つた。まだ簡単な魔法しか無詠唱では使えないでのでそうしないと牽制にもならないのだ。だがお姉様はそれを難なく避けてまたこちらに接近してきて今度は連続で蹴りとパンチを繰り出してきた。

しばらくは捌けていたがだんだんと追い付かなくなつていき最後には当たつて地面に落とされてしまった。

「うーまた負けました。やはり僕は近接戦は苦手ですね。全然勝てません」

「やつぱりそうよね。でもその辺は魔法で補えるんじやないかしら？肉体強化とか召喚魔法で武器を出したりね。出した武器の特訓が必要になるけれどね。」

「確かにそうですね、その辺の魔法も頑張つて覚えてみます。」

「頑張つてね。それじゃ今日はこの辺で終わりにしましようか。そろそろ日も登つてきちやいそうだしね」

「そうですね。それじゃ今日はもう寝ましょうか。あ、お姉様今日一緒に寝てもいいですか？」

「いいわよ。それにしても数ヶ月前まで一緒に寝るのを嫌がつていたのに最近は自分から寝ていいですか何て聞くなんて変わったわねベリー。」

「まつまあ良いじゃないですかそんなこと。そうだフランお姉様も呼びに行きましょう。もう寝ていたらフランお姉様の部屋で寝ましょ

う。」

「そうね、それじゃ行きましょうか」

そいつて二人で館の中に入つて行つた。

本を探して大図書館へ

あれからまた数ヶ月が経つた。今、僕はお姉様に言われたように武器を出す魔法を使おうと頑張っている。だけどなんの武器を出そうか迷っているんだよね。え？

そもそも何で練習しないといけないって言われた武器召喚の方にしているんだって？

だつてさ？原作ではレミリアお姉様はグングニル、フランお姉様はレーヴアテインを使つてるんだよね。なら自分だけ肉体強化つてなんか嫌なんだよね。

で、なんの武器にするかの話に戻るけどさグングニルもレーヴアティンも神話の武器なんだよね。だから僕も神話の武器にするのは決まつてるんだけどじやあ何にするかなんだけどお姉様達の武器は槍と剣なんだよね。被るのは嫌だからこれ以外なんだけど僕は神話の武器に詳しくないんだ。かろうじて知つてているのはトールのハンマーだつたりネプチューンの槍トライデントぐらいなんだけどハンマーは使い勝手悪そうだし槍は被るからダメだし。と言うわけでやつて来ました大図書館。今まで魔法の勉強のためにちよくちよく來てたけどここには魔道書以外にも色々あるんだよ？童話だつたり小説だつたり学術書とかね。だから多分神話の武器が載つてる本もあるはずなんだけど、・・・、本が多すぎてどこにあるのかわからな
い。

どうしようか。

「おや？ベリーお嬢様、何か本をお探しでしょうか？」

「司書さんですか。そうなんです今、神話の武器が載つてる本を探しているんですけど、どこにあるか知りませんか？」

「神話の武器が載つてる本ですか？それならあちらにあります。取つてしましょうか？」

「はい。お願ひします。」

この人は今のこの大図書館を管理している司書さん。今まで魔法の勉強の時に会つたりしてるのでほしい本を言つたらすぐに持つ

てきてくれる。それが仕事とはいえ、こんなに広い大図書館の中などで
こにその本があるのか分かるなんてすごいよね？

「ベリーお嬢様、持つて参りました」

「ありがとうございます。」

「それでは私はこれで失礼いたします。」

「はい。お仕事頑張つてくださいね。」

さてそれじゃあ司書さんが持つてきた本を見てみようかな。あ、ち
なみにパチュリーはまだ紅魔館には居ないよ。まだ会つたこともな
いしいつ来るんだろうね。

それでこの本なんだけど今から読もうと思つてたんだけどもうそ
ろそろ夜も明けちゃうんだよね。紅魔館の中なら多少は大丈夫なん
だけど生活リズム崩すのは良くないからね。この本は部屋に持つて
いつて今日起きてから読もうかな。さてとそれじゃ部屋に本を置
きに行つてから今日はフランお姉様のベッドに潜り込もうかな